



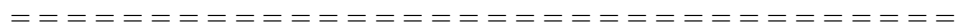
地域日本語支援ニュース こだま 第 376 号

2020.2.27



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。



■活動報告—アメリカにて■

小山良夫さんは AJALT 所属の日本語教師です。国際交流基金の日本文化普及プログラムで米国テネシー州に 2 年間赴任しました。その任務を振り返って、皆様に発信致します。

.....

アメリカ・テネシー州で草の根日本語・文化普及に携わって

AJALT 教師会員 小山良夫

◆なぜ、アメリカに行ったのか

2017 年 7 月から 2019 年 8 月まで 2 年間、AJALT を休会してアメリカのテネシー州クラークスビルという中南部の小さな町に滞在しました。国際交流基金の JOI (ジャパン・アウトリーチ・イニシアチブ) という草の根の日本文化普及プログラムにコーディネーターとして参加して、日本のプレゼンスが比較的小さい中南部の州で、日本の PR に従事したのです。

◆現地でまずやったのは、大学生対象の課外クラス

具体的には、私の仕事は現地の大学に客員研究員として所属して、大学の学生や地域の人たちに日本語や日本の文化を紹介するクラスを開催することと、日本に関するお祭りやイベントを企画し参加するのが主なものでした。

派遣された大学には当時日本人の留学生は一人もいませんでしたが、大学には日本語コースがあり、初級・中級の学生が約 50 名いました。そこでまず、これらの学生を対象に課外の「日本語・日本文化クラス」を開いて、日本語の補習と授業では学べない日本文化の紹介を始めました。この授業は毎週 1 回 1 時間半、2 シーズンに亘って合計 27 回継続しました。

◆市立図書館で、コミュニティーの人を対象にクラスを開講

大学が 2018 年 5 月から 3 カ月の長い夏休みに入ったので、この間に近隣の市立図書館と話をし、一般市民を対象に「日本語・文化クラス（コミュニティー版）」を開くことにしました。このクラスは、対象年齢を 10 歳以上としたのですが、12 歳から 70 才まで、幅広い年齢の人が参加してくれました。

その中で特に印象に残ったのは、ホーム・スクーリングの若い生徒たちです。彼らは 10 代の学齢期ですが、様々な理由で学校には行かず、代わりに複数の家族の親が協力して子供の教育を家庭で行っていて、市立図書館もよく利用します。私のクラスは、教育者の親にとっては格好の教育機会とみえたようで、毎回 7～8 名の若者が熱心に参加してくれました。

どの子もみな個性的で、普通の学校ではちょっとうまくやっていくのが難しそうな子も何人かいましたが、ホーム・スクーリングで個性を生かしながら成長しているのが感じられました。（日本では、こういう教育システムはまだ確立していませんね。）

このほかに、20 代の継続参加者は、社会人女性 1 人と、大学で日本語専攻の男女学生 2 人の合計 3 人でした。社会人女性は独学で日本語を 10 年以上も勉強しています。また 2 人の大学生は、いずれも日本に短期間行ったことがあり、日本の剣道やアニメの大ファンでした。

30 代の継続参加者は、社会人のカップルと子育て中の母親が 2 人の計 4 人で、それぞれに忙しい時間を割いて熱心に参加してくれました。

40 代・50 代の継続参加者はおらず、60 代は地元で長く住んでいる韓国人女性 2 人と、70 代の元軍人で沖縄に滞在経験がある男性が 1 人でした。

このクラスは、基本的に毎週水曜日の 16：30 から 18：00 まで 1 時間半で、約 1 年 3 カ月間・4 シーズンに亘り、通算 44 回開催しました。

◆日本語・文化クラスで得られた教訓

日本国内で日本語を学ぶのと大きく異なって、授業は基本的には英語で進めねばなりませんでした。特に市立図書館での、超初心者で多様なモチベーションを持った参加者に対しては、英語でのコミュニケーションが不可欠でした。

クラスでは、インターネットのサイトから関連のある動画（英語）を探して、授業の中で活用することを心掛けました。適当な動画を見つけてダウンロードし準備するのはかなり手間がかかりますが、参加者の反応は格段に上ります。1 時間半の授業の中で少なくとも 1 回（約 15 分）は動画を見せることにより、参加者へ強いインパクトを与え、関心を持続させる大きな効果があったと思います。

また、日常生活における日本語使用のニーズが存在しない海外での日本語普及では、参加者のモチベーションを高めるために、日本文化の紹介が強力な武器になると感じました。このため 2 シーズン目は「折り紙」クラスを 12 回のシリーズで実施した他、4 シーズン目は、具体的な日本文化（折り紙、マンガ・アニメ、習字、お茶、着物、カラオケ、ゲーム、和食）の実演を各授業の後半で実施し、参加者に体験してもらうことに努めました。

この文化紹介を充実させるためには、講師一人の力量は限られているので、地元に住居の日本人（ないし知日米国人）の協力を得ることに努めました。その結果、3 人の日本人女性と 1 人のアメリカ人男性の協力を得ることができました。

このように、海外において日本語・日本文化を紹介する場合は、日本国内で日本語教育を行うのとは全く違った環境であり、参加者のニーズと関心も大きく異なるため、指導者もそれに適した方法と技術を磨く必要性を痛感しました。

海外での日本語・文化紹介の技術はどうしたら上達できるでしょうか。どなたかご存じありませんか？

◇国際交流基金「JOI」の活動は 以下からご覧いただけます。

<https://www.jpf.go.jp/cgp/fellow/joi/index.html>
